

製本のススメ

Vol. 30

夏休みも目前で、レジャーの企画を煮詰めているときは、とても楽しいですね。里帰りする人・海外へ行く人と様々でしょうが、まずはキッチリ仕事を納めて、スッキリ夏休みを楽しみましょう。

今回は**見た目(バランス)**のお話

イメージと実物とは、ちょっと違っているというのは、よくある話です。印刷物も同じで製本後、初めてその全容がわかり、何だかアンバランスという結果も時折り有ります。ものづくりには『**机上に無い寸法**』が、各所に発生するものですね。

日々製本をする中で、**特に多いのはノドの余白不足**です。中綴じならば、問題はありませんが、クルミの本では背の部分を守る為に **ノドの開き具合が多少制限されます**。頁数が多くて厚みのある本はなおさらです。それにも係わらずノドの余白が10ミリ程度では本を開いた時に、ノド側の文字が読みにくい状態になってしまいます。だからといって、ノドの余白を取りすぎて、小口の余白が減ってしまうのも見た目のバランスが崩れ美しくありません。

また**天地の余白が少ないと**、文章全体が詰まった感じに見え、**印刷面がとても窮屈な印象を受け易く**、文字がいっぱい詰まっていると、読む気力も薄れますね。

最近ではデータ支給も増え、持ち込まれた原稿の修正が出来ないという事も多くなりましたが、一般の方にはデータを作る前に、注意点を説明されると親切ではないでしょうか。特にベタや断ち切りの写真等は、トンボよりも色やサイズを伸ばしておくイメージ通りの仕上がりになることでしょう。

良い本を作るには、経験から生まれる寸法がとても大切です。



Teabreak

先だって活字会社への見学会がありました。パソコンで打つ文字が一般的となっている今日、何か時代に逆行しているかのように思えますが、実は活字も愛好家が多く、自費出版には活版印刷でと言う注文も多いとの事です。

活版印刷にはワープロに無い微妙なインクの滲みが有り、これが読み手の目に優しいそうです(活字が磨り減っているのは論外ですが) また活字台同士によって作られる僅かな余白が、微妙な「ゆとり」となり、文字が読みやすくなっていると言うお話でした。

活版時代は、職人さんが漢字や行体の修正等、文句言いつつ手直しをしてくれました。この心意気はぜひとも、受け継いで行きたいものです。

by (株) 井関製本